

【自由研究発表第5セッション 12月8日 9:20-9:35 A会場 1F大講義室】

フィリピンのブラック・ナザレン信仰における宗教コミュニティーHijosの信仰実践

教会と信徒の枠を超えた信仰運営の日常

松崎 準

(大阪大学・博士前期課程)

本報告では、フィリピンのカトリシズム信仰において、制度教会とデボト(deboto 信心を行う人々。以下デボト)の中間に位置するコミュニティーが、権威的な男性性を発揮しながら、信仰におけるルールを教会と協議し、デボトの信仰実践を主導、監督してきたことを明らかにする。

宮脇(2003)によると、フィリピンのカトリック教会は、デボトが行う信仰実践の正統性について、容認や不許可などの姿勢を示すものの、実際の現場の運営はデボトの主体性にまかせてきた。しかし、特に1990年代以降、教会は信仰の主導権の掌握するため、教会形成のビジョンを、信徒のリーダーシップを生かした参加型のものに刷新した。本報告が事例とするブラック・ナザレン信仰は、マニラ首都圏、キアポ地区で行われる。17世紀初頭にメキシコからもたらされた黒いキリスト像への信仰に対し、現地教会は現在に至るまで「土着的な」要素を黙認しつつも、その正統性を認可してきた。

本研究は、こうした教会による恣意的な認可の姿勢を考慮しながら同時に、長年信仰を主導してきた信徒集団に焦点を当て、教会とデボトの中間で展開される相互的な交渉、組織的な運営、実際の監督の様相を考察する。

この教会とデボトの中間的存在を検討するためには、教会／デボトという区切り以上に、複数の立場をより詳細に明示した上で、俯瞰的に全体像を描く必要がある。具体的には、①教会の聖職者、②教会内部の関係者、③中間的コミュニティー：Hijos(イホス)とその下部組織 Balangay(バランガイ)、④デボトという四つの主体に整理できる。この中間的コミュニティーは教会から教理教育を受け、現場の監督権限を付与されているものの、教会内部には所属していない。一方で、熱心なデボトに広く開かれているボランティア団体ではあるものの、その活動はデボトの個人的な信仰実践とは一線を画するものである。

彼らの活動内容は二つの点を中心に整理することが出来る。一つ目は、大量の人が祈りに来るキアポ教会で、日常的に案内係を務めている。もう一つは、Translacion(トランスラシオン)という、何百万の人が参加する町をあげた祭りにおいて、Hijosの男性メンバーが、聖像に押し寄せる群衆を物理的に押しとどめ、排除し、統制している。

これらの活動において、Hijosの持つ男性性は重要な要素である。Hijosは中間的コミュニティーにおいて上位組織とされ、主に中年の男性で構成される。その中でも一部の選ばれた役職の人のみが、実践におけるルールを教会や行政と直接協議する。また権威性を伴う監督活動において、空間的な秩序を維持する際に、身体的な男性性が発揮される。

このように、中間的コミュニティーがもつ、教会が付与した正統性と権威性を帯びた男性性は、ブラック・ナザレン信仰という特殊な事例において、教会とデボトを仲介する際の特徴を規定する大きなファクターの一つであると言える。

【自由研究発表第5セッション 12月8日 9:40-10:15 A会場 1F大講義室】

ミャンマー仏教瞑想運動の現在を追う

パーアウツ瞑想法による集中力の復興

川本 佳苗

(東京大学/日本学術振興会)

スリランカや東南アジアで信仰される上座部瞑想法の多くは、ミャンマーが近代化する過程で新たに創造されたものである。特に、19世紀後半から20世紀にかけて出現したヴィパッサナー（観察）瞑想は仏教教理を簡素化した形式によって支持され、1950年以降、大衆瞑想運動として呼ばれる展開を見せた。その結果、上座部の聖典や伝統では一般的であった禅定（深い集中）を修練するサマタ（静寂）瞑想が軽視され、瞑想とはヴィパッサナーであるかのような認識が普及している。ミャンマー仏教瞑想の研究においても、マハーシーを代表とするヴィパッサナー瞑想法に主眼が置かれてきた。

本研究では、瞑想運動の現在を明らかにするために、1990年代から台頭してきたパーアウツ長老（Hpa-Auk, 1934年～）の瞑想法を事例とし、その展開と受容を分析する。パーアウツ瞑想法は2000年代より先行研究で注目されつつも、概要が紹介されるか今後の課題として示唆されるかに留まってきた（Jordt 2001, Houtman 2014, Cousin 2022）。その理由として、パーアウツ瞑想法の理解には難解な仏教知識を必要とすることが挙げられる。本研究では、上座部仏教文献、パーアウツの著書や参与観察を用いて、パーアウツの教理解釈からどのように瞑想法が提示され、それを実践者がどのように受容しているかという実態を解明していく。

瞑想文化は政治と影響し合っている。英領時代に国民のアイデンティティとして仏教精神が重視され、在家主導の宗教施設である「瞑想センター」の設立が国家的に支援されるなど、ヴィパッサナーによって心を自制し涅槃を目指すことが在家信徒に推進された。それに対し、サマタは革命、反乱あるいは錬金術や魔術の信仰と関連し、仏教実践としての正統性を低下していった。

パーアウツは瞑想センターの基本形式を踏襲しつつ、戒律順守と長期で修行する僧院型の組織を採用し、ヴィパッサナー実践に先立ちサマタを必須とする段階的な瞑想法を体系化した。二つの瞑想法の大きな違いは、集中力と「光」を用いた視覚的イメージの解釈にある。パオ長老を始め瞑想上級者は、ヴィパッサナー重視の瞑想法をある程度修得したが、さらに向上を求めてパーアウツ瞑想法を実践し、その結果、禅定を経験するに至った。さらに、集中力に比例して出現する光でもって様々な事象を観察することができた。

パーアウツ瞑想法の台頭は、個人の悟りという問題では簡易化されたヴィパッサナー以上の高い到達を求めるという、仏教瞑想の大衆化への反動とも言える。また、社会の問題としては、1990年から民政移管までのミャンマーの転換期に呼応して、心を自制するヴィパッサナーから力を鼓舞するサマタを求める国民の心に呼応したと考えられる。

【自由研究発表第5セッション 12月8日 10:20-10:55 A会場 1F大講義室】

カーディリー教団ト・キーセ派の広がり

ムハンマド生誕祭からの考察

柴山 信二郎

(帝京平成大学)

本発表は、タイ中部アユタヤを中心に広がるイスラーム神秘主義教団（タリーカ）カーディリー教団ト・キーセ派の維持・広がりについての聖者信仰的要素及び民衆イスラーム的要素からの考察の報告である。

タイにはカーディリー教団、シャージリー教団、アフマディー教団等のタリーカが存在するが、それらの中で最大の信者数を有するのは19世紀末頃から広がりを見せたカーディリー教団である。同教団には中部アユタヤを中心に広がるト・キーセ派とワット・コーク派、また、首都バンコク近郊及び南部を中心に展開するカーディリー・アーリー派等がある。これらの中で最大派であり、ト・キーセを聖者（ワリー）と崇めるト・キーセ派は年4回の宗教行事を行っており、各行事にはタイ国内各地から多くの信者がト・キーセ派の中心地である通称プーカオトーン・モスクに集う。

東長（2013）は、イスラーム神秘主義（スーフィズム）は「神秘主義」、「道德」、「民間信仰」の3極から成るとの分析枠組を提唱している。そして、「民間信仰」は他者に頼ったり働きかけたりすることによって自分を取り巻く状況の変革を願望するものであるとし、「聖者信仰」を「民間信仰」の一環であると位置付ける。更に、「民間信仰」を象徴する用語として「奇跡（カラーマート）」、「とりなし祈願（タワッスル）」を挙げ、また、「聖者信仰」にまつわる行為として「とりなし祈願」と「聖者廟参詣（ズィラーヤ）」を挙げる。本発表では、東長の分析枠組・概念を援用して、聖者信仰を構築する概念（聖者信仰的要素）として「奇跡」、「とりなし祈願」、「聖者廟参詣」および「恩寵（バラカ）」を想定し、2024年9月に3日間にわたって執り行われたムハンマド生誕月初祭（以下、ムハンマド生誕祭）において観察できた信者達の信仰実践の中からこれら聖者信仰的要素を抽出することを試みる。また、ムハンマド生誕祭において見られたその他の聖者信仰にまつわる諸行為として民衆を惹きつける要素（民衆イスラーム的要素）についても言及する。そして、聖者信仰的要素や民衆イスラーム的要素がト・キーセ派の維持・広がりの一助となっていることを指摘する。

「奇跡」の伝承を持つト・キーセを信奉するト・キーセ派のムハンマド生誕祭では「聖者廟参詣」、「とりなし祈願」、「恩寵」を求める等の実践が観察できた。また、生誕祭では「楽隊による演奏」、「クラベークラポン演武」等が観察され、これら要素が同派信者の維持や広がりの一助となっていることが見て取れた。

なお、タイのイスラーム社会ではスーフィズムは「正しいイスラームではない」と批判される傾向がある。ムハンマド生誕祭では同批判への対処として、各儀式の幕引きに国王賛歌を演奏する等で公的イスラームとして「正しいイスラーム」を主張する様子が観察できた。このこともト・キーセ派の維持・広がりの一助となっていると考えられる。

【自由研究発表第5セッション 12月8日 11:00-11:35 A会場 1F大講義室】

千の唇、百の舌

エンデの妖術と日本のいじめ

中川 敏
(大阪大学)

規約とは個人に先立って存在する社会のルールである（道路は右側をあるけ）、それに対して黙約は社会の成員がその都度つくりだしていくルールである（ボートを漕ぐタイミング）。構造主義は規約を文化と同一視する。進化論的な人類学は黙約によって文化が誕生したと考える。この発表は、エンデの文化（インドネシア）における妖術の一形態、「千の唇、百の舌」をきっかけにして、規約と黙約の問題を考察する。エンデにおいて通常の妖術の形態が規約の相貌を呈するのに対し、「千の唇、百の舌」は黙約の相貌を呈している。

オースティンは彼のコミュニケーション議論（言語行為論）の出発点を規約にもとめた。彼の議論の中心である「発語内の力」の源泉を規約であるというのだ。ストローソンは、オースティンの言語行為論とグライスのコミュニケーション理論を対照するという新しい視点を導入した。それにより、コミュニケーションの基礎となるのは規約ではなく意図であるという可能性を指摘した。グライスの「非自然的に意味する／意図する」の議論は次のようにまとめることができる：ダニエル・デネットにならって、グライスの議論を高次の志向性（意図）として再提示したい。その言葉づかいに従えば、グライスの理論で問題となっているコミュニケーションは、「3次の志向性」であることとなる。すなわち、「Aは「Bは「Aがpと信じている」と信じている」と信じている」という状況こそがコミュニケーションを可能にしているというのだ。志向性が3次まで達したとき、二者間の間の黙約が産まれたと言うことが可能であろう。オースティンは規約が行為（コミュニケーション）を産むと主張したのに対し、グライスは行為が黙約を産むと主張しているのである。二者間の黙約の議論を三者間の黙約（社会性）へと広げることができれば、規約（あるいは文化）の発生の謎を解く突破口となるであろう。そのような展開を示唆する議論として、この発表では別役実による『ベケットといじめ』の議論を紹介したい。別役は1986年のある中学校のいじめをとりあげる。鹿川くんへの日々のいじめは、最終的に教師も参加した「お葬式ごっこ」へ、そして、鹿川くんの自殺へと至ることになる。教師をも巻き込んだこれらのいじめの異様さを、別役は近代的「個」によるいじめとのずれによって鮮かに示す。そして、この異様ないじめの背後にあるものを、別役は「無記名性の悪意」と呼ぶ。この「無記名性の悪意」を説明するのが別役の本の目標である。彼はそれを近代的な「個」に対する「孤」という概念を軸として描く。「個」が関係をつくるのに対し、関係が「孤」を作るのである。そして、この「孤」との関係でうかびあがる「関係」こそが「無記名性の悪意」の正体である、と別役は説く。私は別役の言う「無記名性の悪意」が「三者間の黙約」の別名だと考えている。今回の発表では、この別役の議論を、もう一度デネット・グライスの議論に重ねる作業の粗筋を示したい。その作業こそが、文化の源泉をさぐる議論の骨格となる筈である。